

ダブルバルーン小腸内視鏡アトラス

山本博徳, 砂田圭二郎, 矢野智則 編

＜書評者＞ 坂本長逸 (日本医科大学教授・消化器病学)

自治医科大学教授の山本博徳先生が『ダブルバルーン小腸内視鏡アトラス』を医学書院より出版した。今日の小腸診療の広がりを見ると待ち望まれていた 1 冊といえよう。ほとんどの消化器内視鏡医は、山本先生のことをよくご存じなので私が付け加える言葉はないが、それでも彼がダブルバルーン小腸内視鏡 (DBE) の開発者であり、世界 DBE コンセンサス会議をリードして DBE という名称を世界的に定着させた第一人者であることは、あえて述べておく必要があろう。今日 DBE は欧米でもプッシュ式小腸内視鏡に取って代わり、全小腸観察と処置が可能な内視鏡として定着している。この小腸内視鏡を世界に広め、今日の小腸診療を可能ならしめたパイオニアが山本博徳教授であり、彼が満を持して出版した本が『ダブルバルーン小腸内視鏡アトラス』といえるだろう。したがって、本書は小腸診療をこれからめざす消化器内視鏡医にとってはなくてはならないものといえるだろう。

本書ではパイオニアならではの視点で、なぜプッシュ式小腸内視

鏡では小腸深部挿入が困難であったかが解説され、そしてその考察の上に立って DBE を開発した経緯が詳細に述べられている。さらにこれから DBE を始めようとする内視鏡医にとっては、豊富な図によって挿入法が解説されており、読んでいるうちに誰でもできる気持ちにさせてくれる点が実に良い。通常の内視鏡、特に大腸内視鏡の挿入手引書を読んでも山本博徳先生の DBE の挿入解説ほどには明瞭ではなく、結局大腸内視鏡は経験しないとわからない部分が大半であるが、本書に解説された DBE に至っては、読めば誰でも頭で理解でき、明日から実践が可能と思わせてくれる。

これまで、小腸の専門家といえば炎症性腸疾患を専門とする先生であった。しかし、最近 5 年間の進歩によって、小腸には実にさまざまな疾患が存在することが明らかになった。また、すでに明らかにされていた疾患の肉眼的観察や、DBE を用いた生検や処置が可能となった。本書では挿入法にとどまらず「ここまでできる内視鏡治療の実際」と題して、Crohn 病小腸狭窄に対する拡張術やその他さ

まざま治療手技や適応が詳細に解説されており、その点でも本書はこれから始める先生や、今、実際に DBE を経験されている先生方にとって、パイオニア施設での手技や実践が手に取るように理解できる解説書となっている。さらに、DBE を必ずしも行わない消化器内科の先生方にとっても、後半の小腸疾患 42 例の症例紹介は、今どのような疾患が小腸で診断され治療されているのかを理解する上でぜひ一読していただきたい内容である。症例は小腸結核、血管異形成、アミロイドーシスなど、いずれも異なる 42 例で、簡潔に表現された臨床経過とともに CT 画像、DBE による小腸画像、組織像が合わせて紹介されており、誰でも簡単に読め、1 つの疾患が 2 ページで理解できるような形式となっている。

このように、本書はこれから DBE を始める先生、現在 DBE や他のバルーン内視鏡を実践中の先生のみならず、小腸疾患理解のために消化器内科の先生方にもぜひ一読を勧めたい小腸内視鏡アトラスとなっている。

●B5 頁 144 2009 年
定価 9,450 円
(本体 9,000 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00714-6]
医学書院 刊